

元気のヒケツは

自宅で週二回、青少年ホームで月三回、茶華道教室を開いて生徒さんに教えているほか、市の文化祭などで茶席を設けたり、学校などからの要請によって体験教室も開いている得納邦江さんに元気の秘訣を伺った。

■自己研さんを欠かさず
毎年五月に行われる日光東照宮・春季例大祭で呈茶の奉仕を約五十年続けています。

また、ほとんど毎月、京都の家元を訪問し、指導を受けると共に全国各地から集まる教授たちとの情報交換や、美術館、寺社巡りをして自己研さんしています。ほかにも、県や市などの文化交流団体の方々と海外や国内各地を訪問しています。(いただいた名刺には、英字の併記がありました)

■茶道とともに生きてきました
昭和三年九月広島県で生まれました。子どもの頃からお茶を習っていて、戦後すぐに茶会を開いていた環境で育ったので、昭和二十五年に結婚し、矢板



文化祭で、お点前が終わり、道具の説明を...

元気のヒケツは伝統文化を伝承すること 得納邦江さん(85歳) 扇町

市に移住した翌年の二十六年から茶道教室を開き現在まで続けています。

現在は矢板市文化協会顧問(前会長)、栃木県茶華道協会顧問(前副会長)を引き受けています。

■この地に住んでみて
当初は言葉が違い、料理の味付け、食材が異なるなど、見るもの、聞くものすべてに戸惑いがありました。特に「しもつかれ」はなかなか口にすることができませんでしたが、今は慣れて美味しくいただいています。すっか

り矢板が故郷になってしましました。

■教えることが元気の秘訣
私は気にしない性格なのでストレスが貯まらないし、それなりに身体を動かしています。そして自分が学んだことを少しでも多くの人に伝えたいとの思いで、単に茶事だけでなく一般的な礼儀作法もそのときに教えています。そして教えている時には若い人からはエネルギーをもらっているような気がします。それに、抹茶を普通の人より多く飲んでいいるからでしょうか。

生徒さんに得納先生の元気のヒケツをお聞きしたところ、「生徒は小学生から八十歳の人までいて、年齢に応じた教え方をするように気を配ってくれます」「毎月のように京都に行き勉強しているように高いモチベーションを持っていて」「茶道は千利休が確立して約四百年そのままの作法が口述で伝え引き継がれています。こういう伝統文化は先生たちの茶華道に対する情熱によるものだと思います」「稽古中は緊張と弛緩が交互にあり、頭と身体をよく使って刺激があるからでは」などの言葉が返ってきました。

(T・M)

武者ヶ岳の東屋(寺山地区) 地域活性化の起爆剤に

●荒れた場所を数年かけて
最初のきっかけを作った内田さんは、横浜在住でしたが、退職後の十年ほど前に雑誌で、新潟から古民家が移築され、空き家になっていることを知り、寺山に移り住んだとのこと。

家の周りを整備しているうちに、地域の人から武者ヶ岳は、昔は、子どもの遊び場で東屋もあつたらしいと聞いたが、現状は、雑木林や多くの枯れた松が散在し、登る道も無く荒れた状態だった。そこで、この地を整備し、地域活性化の起爆剤になればと思ひ、数年前から地域のひとと相談して、持ち主の許可を得て木を伐り、地域の人だけで道路



整備や木材の搬送を行い、約半年かけて東屋が完成し、落成式を行った。
●全て自分たちの手で
地域の人から山の木を提供していただき、それを有志で伐採し、皮をむいて木材にした。軽トラックが通れるように道を整備し、木材を山頂に運んで手作りで作った。すべて地域の人々のボランティアで行った。

●年々増える訪問者

山頂から初日の出を見ることが増えたり、矢板の花火大会を上から眺めたり、子どもの遊ぶ姿も見るようになった。また、毎年秋の遠足で、泉小学校の全児童も来てくれて

いる。とても眺めが良いところなので、他県から何度も訪れてくれる人もいるようになった。整備した甲斐があった。

●苦労の連続
東屋の屋根の材料を、軽トラックで運んだ時、結び方が弱かったのか、頂上近くで材料がすべて落ちてしまい、一本ずつ運び上げるのに大変な苦労をした。また、屋根をもう少し大きく計画していたが、材料が長すぎて組み上げができたため、材料を短く切って組み上げた結果、屋根が小さくなってしまった。

夏の暑い中での木の皮むきも大変だった。
●今後の夢
桜の木を約百本、そのほか、桃、もくれん、藤なども植え、これからの季節は花を楽しむことができるので、多くの方に来ていただきたい。頂上からは、八溝山、筑波山も見えます。また、自然豊かで、いろいろな植物も見られます。今後は、ミニコンサートなどを計画し、遊歩道の整備も行い、散策コースの名所にしたいと思っています。

(T・H)